

中学校技術・家庭科保育領域をふまえた 小学校における授業実践

愛知教育大学 家政学教室 中 村 喜美子
大治町立大治小学校 萩 野 登記代
愛知教育大学 幼児教育教室 久 世 妙 子

Learning of “Early Childhood Education and Care” in Elementary School as the Foundation of “Industrial Arts and Home Economics” in Junior High School

Department of Home Economics Kimiko NAKAMURA
Oharu Elementary School Tokiyo HAGINO
Department of Early Childhood Education Taeko KUZE

I はじめに

中学校技術・家庭科保育領域では、中学生の発達段階として、社会に目を向け、同時に自己理解を深めることができる大切な時期であると考え、最終目標として、「幼児理解を通して人間性を尊重する心情を養う。」と考え指導してきた。4年間の実践活動で、保育領域の学習を通して生徒の変容を見ることができ、ねらいに迫ることができた¹⁾。

新指導要領が実施され中学校の技術・家庭科は4つの領域が必修科目となり、残る7つは生徒の興味・関心などに応じて学ばせる選択領域となった。保育もその1つであるが、男女共学が進み、保育領域の履修は増えてきた²⁾。そんな中で、萩野は中学校から小学校へ転任して、6年生を担任することになった。6年生はまだまだ自己主張が強く、自己中心的な者が多く、周りの人の気持ちを思いやる行動のできる子供は少ない。機会を見つけては、思いやりを持って行動できるよう指導してきたが、当初は思い通りの成果が得られなかった。そこで、中学校での保育領域の実践を見直し、

小学校における授業時間内の指導を計画し、実践した。

6年生の家庭科の授業で家族を扱い、自分の生まれた時の様子や幼児期を振り返ることによって、自分がどのように育てられてきたかを理解させ、成長段階で関わってきた家族や周りの人への感謝の気持ちを持ったり、他の人のことを考えることができるようになることを願い、実践活動を行った。その結果、児童の心情や態度にも良好な変容がみられたので報告する。

II 研究経過

1. 中学校における授業実践

1987年度～1990年度の4年間、中学校3年生を対象として、男女共学で保育の授業を実践した。

(1) 生徒の保育に対する関心の実態

授業を始めるにあたって生徒の保育領域に対する関心の実態を知るため、毎年度、同一の質問紙調査を行った。ここでは、1987年度(男子115人、女子121人)と1990年度(男子83人、女子87人)について述べる。男女差を χ^2 検定で求めた。両年度とも、家庭に幼児がいる生徒は2%と少ない。幼

児を好きと答える者は、女子の方が男子よりも多く、1987年度では有意であった ($P < 0.01$, 図1)。

男子が保育を学習することを必要と思う者は、男子では50~60%, 女子では70~80%で女子の方が多く、男女の間に有意な差がみられた (図2)。一方、女子が学習することを必要と思う者は男女とも90%を超えており (図3), すでに性別役割分業意識が現れている。保育学習で学びたい内容は、男子ではおもちゃの製作, 女子では食生活とおもちゃの製作が多かった (図4)。

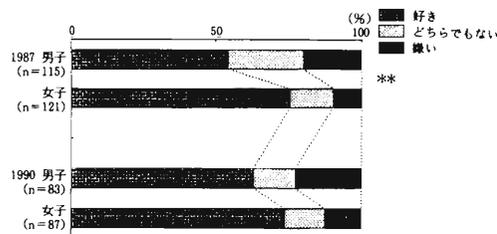


図1 幼児が好きか

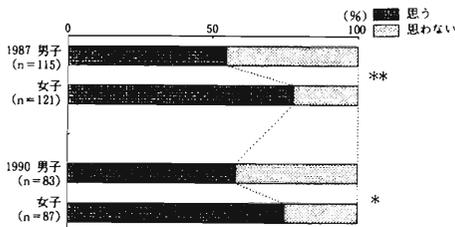


図2 男子が保育領域を学習することを必要と思うか

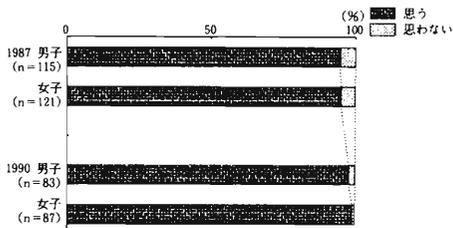


図3 女子が保育領域を学習することを必要と思うか

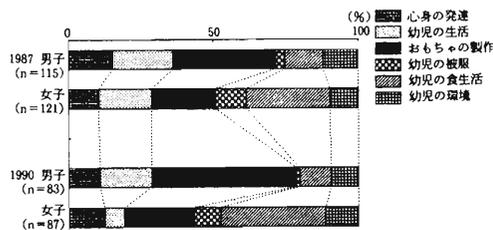


図4 保育領域で学習したい内容

保育領域の指導上問題となるのは、生徒が幼児と接する機会の少ないことである。そこで幼児に接するための保育園訪問と男女共に関心の高いおもちゃ製作を組み込むこととして、指導計画を作成した。

(2) 指導計画の作成と実践経過

保育領域指導内容の構造図 (図5) を描き、以下の4点を考慮して30時間の指導計画を作成した (表1)。

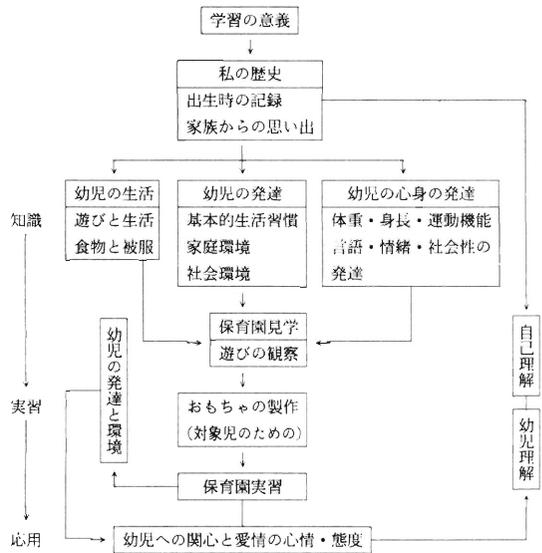


図5 保育領域指導内容の構造図

① 保育園訪問

幼児との接触の少ない生徒が多いので、幼児理解の方法として保育園訪問を2回実施して幼児の生活を観察させ、幼児を身近に感じさせた。

② 製作カードの工夫, 対象の焦点化

実習教材として関心の高いおもちゃ製作に重点を置き、幼児の生活, 運動機能の発達, 情緒の発達などの机上学習を活かしておもちゃの製作ができるようにした。

③ おもちゃの製作

おもちゃの製作前に幼児を観察させ、具体的に対象幼児の年齢を決め、「この子のために喜ぶものを」という動機づけをさせ、製作に入った。

④ 幼児理解

自分の幼児期のことから授業が始まるように配

表1 中学校保育領域指導計画及び実践経過（1990年度）

学習項目	時間	学習指導	教材教具	実践経過
1 オリエンテーション 自分の幼い頃	2	幼い頃の思い出を家族に記入してもらい、それを読みながら幼児の行動をつかむ。 保育学習の意義を理解する。	母子健康手帳 家族からの手紙	家族からの手紙はほとんど提出され、名前をふせて紹介した。「だれー。」とか「ぼくもそうだった。」など授業はとても盛り上がった。母親たちからも、「アルバムを開いて昔話に花がさき感動した。」などと報告をうけた。
環境	2	人は人に育てられてこそ人間らしくなることを知る。 人間の可能性と環境の大切さに気づく。	スカモンの 発育曲線 オオカミに 育てられた子	出生時の身長・体重にふれ、現在と比較し、未熟児についてもふれた。 おおかみに育てられた子の話は印象強く「三子の魂百まで」という言葉が生徒から出された。 さるを人間の子のように育てた話と比較し、人間の可能性の大きさに驚く生徒がみられた。
2 幼児の心身の発達 体の発達 心の発達	6	各自に成長の記録を発表させ自分の幼児期との比較をする。 体の特徴や発達段階をつかむ。 映画を使用し受精から誕生までの様子を知る。 幼児の言葉、社会性、情緒の発達について知る。	映画 「生命創造」 VTR 幼児の声(テープ) 幼稚園献立表	映画はフランス製で、受精から出産までの様子を記録したものである。生徒には刺激が大きく胎内での胎児の成長の様子に驚いていた。また、無事生まれた時の父の涙にふれた感想も多くみられた。
3 食生活	2	胃袋の大きさから間食の意義を考える。 幼児の栄養の特徴、幼児に適した食品の調理法を考える。	VTR 幼児の声(テープ) 幼稚園献立表	胃袋の形、大きさから間食は幼児にとって食事の1つであることが理解できた。
4 幼児の生活 遊びと生活	13	遊びの意義について知る。 保育園見学 対象年齢児観察 心身の発達に応じた遊び道具を工夫して、班で題材を決める。 いままで学習してきたことを、対象児についてまとめ、よりよいおもちゃ製作のため観察をする。 幼児は遊びからいろいろ学んでいくことを知る。 観察結果をもとに遊び道具を工夫して製作する。 保育園実習 対象児と自分がつくったおもちゃで遊び、幼児に直接触れることにより幼児を理解する。 保育園訪問をし、遊んだ様子やおもちゃについて発表する。	VTR (遊びの様子) スライド (昨年度のおもちゃ) 製作計画図	1回目の見学でおもちゃ作りのための遊び道具の観察など、班で分担し意欲的に行われた。 生徒は、今までの机上学習を実践へとつなげる活動ができた。また、幼児にふれる時、自然にかがんだり、ゆっくりしゃべったり、相手を思いやる行動がみられた。教室へ帰り、製作に取りかかった。幼児のためにという思いが伝わってくる。安全性、耐久性に配慮し、班で活発に話し合いがなされた。 いさんで出かけたが、すぐおもちゃが壊れた班、あきらめた班などは話をしたり、体を使ったり、みんなニコニコ2時間間接した。 幼児の無邪気さ、かわいさに素直に感動する子、やんちゃさにお手上げの子、感想はさまざまであるが、幼児を通して自分の幼いころを顧みることができたと考える。「僕たちにもあんなころがあったんだろな」という感想も多かった。 生命の尊さに気づいてほしいと願い色々な事例を提示し授業をし、その後、各自事例を持ち寄り発表し合う。家庭内暴力、子殺しなど、生徒は一つ一つ真剣に受け止め活発に意見交換をした。 授業を通して最後の感想には、親への感謝、今の自分、これからの生き方などについて書いたものが多かった。
5 幼児をとりまく環境	5	新聞記事などを各自1つ持ちより、親の役割、環境などについて話し合う。	新聞記事 典子は今 (サリドマイド 児の記録)	

慮し、最終的には、生命を守り育てる環境について考えていこうとする立場を養うようにした。

実践経過は表1の通りである。保育園訪問を2回実施し、園児と接触する中で、対象幼児の年齢を特定しておもちゃを製作したこと、おもちゃを使って幼児と遊んだことは効果的であった。

(3) 評価と反省

おもちゃ製作の感想文を読むと、他人のために何かを作るという経験をあまり持たないため、おもちゃ製作の段階で苦労したという記述が多かった。真剣に相手のことを考えた故の悩みである。

最終感想では、家族の人への感謝の気持ちを書いた生徒が約6割いた。障害児や地球汚染にふれたことにより、自分の住んでいる環境の良さに気づき、これから自分がどうすればよいかなどの感想を書いた生徒もいた。障害児についてはほとんどの生徒がふれていたが、まだまだ「かわいそう」という感傷的な感想が多かった。同時に実施した質問紙調査によれば、授業で最も楽しかったことは保育園訪問、おもちゃの製作であった(図6)。また、ほとんどの生徒が、保育学習は必要であり、将来役にたつと答えていた(図7)。

保育学習による生徒の変容の事例(1987年度)
 保育園訪問を始めた年、ひとりの生徒がいた。よくいうつっぱりであった。おもちゃの製作は全くせず、当日「行きたくねー。」と言いなながらも訪問に参加した。保育園では幼児をひざにのせ、ニコニコしていた。純粋な子供たちの目に触れて、彼は暴力も暴言も何もかもすてた。馬になって幼児と遊んでいる彼の姿に同級生も目をみはっていたようである。授業が終わった時の感想には、出産間近の私にあてて、「先生も子どもが生まれるらしいけど、元気な子どもをうんで下さい。」とだけ書いてあった。彼の変容は、私にとって、次年度からの保育学習の大きな自信となった。

2. 小学校における授業実践

(1) 中学校の保育領域につなぐ指導計画の作成

中学校における保育領域の学習を想定して、小学校での教科および教科外活動から関連する教育内容を探りだし、以下の3点を考慮して、実践計画を作成した(表2)。

①小学校家庭科の「家族の生活と住居」で家族の中の一員としての誕生と幼児期までの発達を取り上げる³⁾。

②小学校では担任がすべての教科を担当する。国語の教科書(光村図書出版)に、思い出を「巻き物」に、という教材があり、2月中旬に学習させることになっている⁴⁾。教科書では1年間の思い出を扱っているが、これを12年間に広げて思い出を書かせ、発表させる。学級活動の中では、中学校の保育園訪問にあたる実習活動を行うこととし、6年生に自分たちの集会活動の中で、低学年児童のための会を企画させる。

③他の教科活動では、生命誕生は5年生の理科で、2次性徴については5年生の保健で指導することになっている⁵⁾。

また、6年生の学級活動で、「いのちの誕生」(保健・安全指導)についてふれることになっている⁶⁾。

(2) 授業実践

1993年度と1994年度の2年間について報告する。

1) 家族ってなんだ?

「家族がいなくなるとどんな所で困るか。」という問いかけをして話し合いをもった。精神的な面

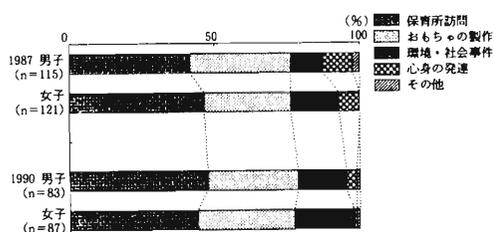


図6 授業で最も楽しかった学習内容

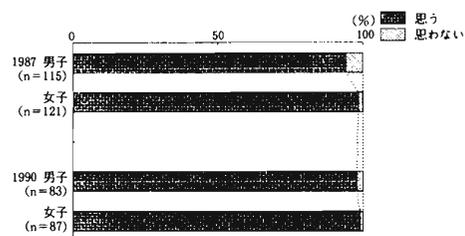


図7 保育領域の学習は将来役にたつと思うか

表2 小学校6年生における指導計画（1993年度、1994年度）

目標

- 1 自分の生い立ちを知り、それぞれが親や家族に育てられてきたことを認識し、父母の愛情や苦勞を知り、家族の人たちへの感謝の気持ちを持つ。
- 2 下級生のための会を企画し、下級生と触れ合う中で、現在の自分と対比させるとともに、自分の幼かった頃を想起させ、下級生を思いやる気持ちを育て、広く人間を尊重する心情を豊かにする。

時間	学習項目	教科	学習指導	留意事項
1	オリエンテーション 家族ってなんだ？	家庭	家族の働きを考える。 家族がいなくなったらどんな所に困るか話し合う。	家族の中の自分という立場から考えさせる。
2	生まれてから 今日まで	家庭	家族に記入してもらった生まれた時の身長、体重などをもとに、自分の生まれた時の様子を知る。 家族の一員であること、親の愛情を自覚させる。	あまり詳しいことには触れず出生時の身長、体重、様子、幼い頃のエピソードのみにしておく。
3	いのちの誕生	学級活動	ビデオ「生命創造」サン・グラフ社（1994年度実施） 胎児の発育と出産について知る。 絵本『こわいことなんかあらへん』を読みかせる。 （重度障害児施設止揚学園の話）	中学校で見た映画の児童版であり、胎内での成育の様子を理解させやすい。
4	1, 2年のために 何かやろう！	学級活動	自分達のできる範囲で1, 2年生のためにできることを考え、企画実施する。	幼児理解につなげる。 低学年との会を企画する。
5	絵本の部屋	学級活動	本校には絵本の部屋があるので、その部屋をきれいにし、招待状をつくり配布し、「絵本の部屋招待会」を開く。 1時間を使って実施する。	低学年の発達段階にあった出し物を考えさせる。
6	招待会練習	学級活動		
7	飾りつけ	学級活動		
8	招待会	学級活動		
9	私の12年間	国語	卒業を前に自分の12年間を振り返りプリントにまとめクラスで冊子を作る。名前の由来や生まれた時のできごとなど自由に記入させる。	自分の12年間を振り返り、これからの決意も含めてB4, 1枚に記入させる。
10	私の12年間の発表	国語	一人一人発表する。 中学校に行ってから決意も同時に述べる。	卒業式の朝「ありがとう。」と家族に感謝の気持ちを伝えられるよう話をする。

と物質的な面の2つが出てきた。物質的な面（食べ物、衣服、風呂など）は家族がいなくても外部委託で代用することも考えられるが、精神的な面での家族の代用は考えられないという結論が出た。アマラとカマラの例もあげ、家庭は教育の場であることも確認した。

2) 生まれてから今日まで

自分の生まれた時の様子を家族に質問させ、身長、体重などを現在と比較させた。幼い頃の出来事が非常におもしろかったようで、幼児のいろいろ

な行動に興味を持つことができた。また、仮死状態で生まれた子の話が偶然出てきたことから、生まれた時の両親の思いなどにもふれることができた。

3) 生命の誕生

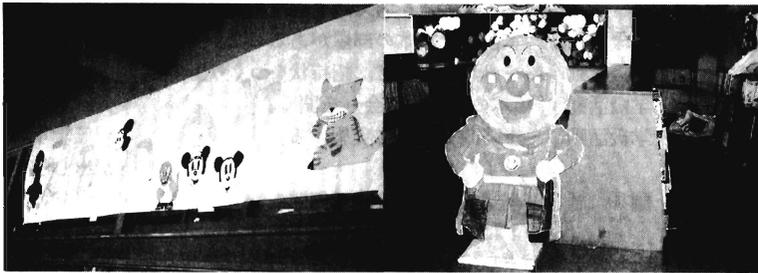
1994年度は、養護教諭の先生からビデオを借り、「生命創造」（サン・グラフ社）を見た。母親の胎内にいる胎児の様子がわかりやすくみられ、子供もビデオの最中に「ア！3か月くらいでもう人間の形はできているんだね。ここで薬を飲むと

大変なんだよね。」という会話も飛び出した。

その後、絵本の読み聞かせをした。使用した絵本は『こわいことなんからあへん。』⁷⁾という題の本で、主人公の重度障害児のやよいちゃんに対する周りの反応をまとめたものである。重度障害児施設止揚学園の子供たちが絵を書いている。1993年度は、『さっちゃんのまほうのて』⁸⁾を取りあげた。授業後の感想では、この絵本とビデオに関するものが一番多かった。子供たちの心に訴えることができたと考える。感想文には、今日まで育ててくれた親に対する感謝の気持ちが多く書かれており、表2の目標1を達成することができた。子供たちの感想文から「親に伝えたいこと」を学級通信に載せたところ、親から「久しぶりにアルバムをみて家族で話しました。」「どんなビデオか見てみたい。」などと反応が返ってきた。両親にも興味深いこの題材は、授業参観の時に親子で見ると良い方法であると感じた。

4) 1, 2年生のためにできること(1993年度) 学級会で、卒業にあたって自分達でできることを考えようと話し合ったところ、子供たちから、「絵本の部屋があるが汚いので、アンパンマンの部屋にして1, 2年生を招待しよう。」という意見が出た。まず班ごとに作るものを決め、班長会で話し合った。壁面、天井、入り口の工夫などいろいろな企画が考えられ製作された。子供たちの夢はどんどん広がり、自主的に絵本の部屋に行き、飾りつけも進められた。つぎに、出し物を考えた。漫才とかクイズとか色々考えたが、中心は「おばけ」というペープサートの劇にした。その他の出し物についても「低学年の喜びそうなものを」と、相手のことを思いやる意見がたくさん出された。1年生と2年生に招待状を作り各クラスに持っていった。当日は校長先生も参加し絵本を読んでくださったりして、6年生もおおはりきりであった。翌日、1年生からの手紙が届いた。それを見て

写真1 絵本の部屋の飾りつけ



学習による児童の変容の事例

粗暴な面がみられるが、根は優しい子である。最初「俺、がきはきらい」と言ってアンパンマンづくりは班の子供たちに任せてばかりだった。「絵がうまいから描いてごらん。」の励ましで少しやる気をもせ、描いてみると意外に上手で班の友達に認められると、自分から進んでいろいろな物を描いてくれた。「俺、本読み下手だから、間で漫才やるわ。」と意欲的に参加した。

感想には、「1, 2年生がよろこんでくれてほんとうによかった。おれにもあんなところがあつたとおもうとはずかしいぜ。」とあつた。低学年の行動を観察することにより、自分の幼児期を振り返る目標が達成できたと考える。

写真2 1年生からの手紙



方教育事務協議会, 1989

- 2) 榎田博文: 個を生かす授業の創造—一人一人が持ち味を発揮する学習活動を通して—, 三河 教育研究会技術・家庭科部会夏期研究集会報告書, 1994
- 3) 櫻井純子: 3 中学校「技術・家庭科」との関連, 『小学校学習指導要領の展開 家庭科編』 pp32-35, 明治図書, 1989
- 4) 海部地方教育事務協議会: 小学校教育課程案第6 学年, pp国6-24~25, 1992
- 5) 愛知県教育委員会保健体育課: 性の指導の手引き, pp29-32, 1994
- 6) 4) に同じ, pp特活(学級活動)6-5
- 7) 福井達海編, 馬嶋克己絵・字: こわいことなんかあらへん, 偕成社, 1993
- 8) 田畑精一, 先天性四肢障害児父母の会他: さっちゃんのみほうので, 偕成社, 1993